

「別室登校Ⅱ」 ～教室復帰に効果的な関わり～

平成22年度に実施した調査研究によれば、小学校の25.8%、中学校の77.8%で「別室」を利用した指導や支援が行われています。「別室登校」児童生徒の内、小学校では49.1%、中学校では26.8%が年度内に完全に教室登校に戻ったり教室登校が増えたりしており、「別室登校」が児童生徒の教室復帰に効果的であることが明らかになりました。

学校全体として「別室」の機能を高めるために「別室登校」児童生徒とどのような関わりが教室復帰に効果的か平成22年度に引き続き平成23年度に行った調査研究の結果からいくつかのポイントを示します。

なお、調査研究の概要については、京都府総合教育センターホームページITEC (<http://www.kyoto-be.ne.jp/ed-center/>)の「別室登校研究」のバナーからご覧ください。

教職員の「別室登校」児童生徒への関わり方

「別室登校」児童生徒への教職員の関わりには4つの要素があることがわかりました。

直接的コミュニケーション

- 「別室」で世間話など気楽な会話をした。
- 適性を知る等、自己理解を深める指導を行った。
- 個別に気持ちを聴く時間を確保した。等

学習成果期待

- 学習時間を確保した。
- 個別の学習指導をとおして学習の遅れを取り戻すようにした。
- プリント等を用いて自学自習をさせた。等



家庭への働きかけ

- 家庭訪問を行った。
- 家庭との電話連絡を行った。
- 登校を促すため、電話をかけた。等

教室とのつながり

- 教室にいる児童生徒と休み時間に交流するようになった。
- 普段から教室に復帰するように促した。等

<直接的コミュニケーション>

「直接的コミュニケーション」は関わりの基盤となる最も大切な要素です。

<学習成果期待>

「別室」での学習も大切ですが、単に自習による学力向上や学習習慣の定着といった効果のみを期待するのではなく、学習をツールとした直接的な関わりが効果的です。

<家庭への働きかけ>

学級担任を中心に「別室登校」児童生徒の家庭と連携し、協力体制を築くことも有効です。

<教室とのつながり>

心の準備が整ったときに学級の児童生徒と交流をもてるようにすることも大切です。

小学校中学校別にみた教室復帰への効果的な関わり

小学校中学校ともに、「別室登校」を通じて様々な関わりを受け入れることができた「別室登校」児童生徒は教室復帰をしやすいことがわかりました。

学校種ごとにみた児童生徒の発達段階に応じた効果的な関わり

小学校

教室とのつながりを意識した
総合的な関わり

中学校

「別室登校」生徒一人一人の特性に合わせた
個別の関わり

別室担当者は「別室登校」児童生徒に直接関わる機会が多いという強みを活かし、関わりの質を高めていくことが大切です。

子ども、保護者の思い

子どもの声から

小学生：「休み時間のたびに友だちが遊びにきてくれたことや給食と一緒に食べることができてうれしかった。」「先生と一緒に勉強できたことや、先生に自分の気持ちが話せたことがよかった。」

中学生：「勉強をしながら、いろんな先生と雑談ができた。」「他の別室の子たちと友だちになり、よく話すことができてよかった。」

保護者の声から

「別室での一年間は、子どもにとって大きな力になりました。子どもに寄り添い、子どものペースを大切にしながら少しずつ進んでいくことができ、先生方への感謝は言葉では言い尽くせません。」

「子どもの今の状態を見ながら段階を踏んで過ごしやすい場所を作ることが必要だと感じました。学校に行くことは大切です。だからこそ、別室は学校での居場所となり、親も子どもも安心できました。」

事例からみえてきたこと

① 見立てながら関わり、関わりながら見立てる

症状を出している児童生徒にどう関わればよいのでしょうか。一人一人状態や背景は違うわけですから、個々によって関わり方を変えなければいけない場合もあるでしょう。つまり、適切な関わりを見出すには的確な見立てが必要です。

② 同年代のつながり

同年代の友人の存在は、こころの支えになるだけでなく刺激にもなります。教室復帰のためには教室の児童生徒とのつながりも大きな鍵となるのは確かです。しかし、無理に同級生とのつながりを作らせようとすると逆効果になる場合もありますから、当人の負担にならないような慎重さも求められます。当人の心の準備とモチベーション、学級の土壌が整っていることは必要条件といえるでしょう。長く教室から離れていた児童生徒が教室に入る時には、周囲の想像を超えた相当な緊張と不安が生じ、またそれを隠そうとするこころの働きが、相当なエネルギーを要するのです。

③ 連携

大人の関わり方の方向性がバラバラであると、一番困ってしまうのは児童生徒です。教職員と保護者、関係機関が意思疎通を図りながら同じ歩調で進むことは大変ですが、とても大切なことです。当人が安定することで保護者も安定するパターンもあり、保護者が安定することで当人が安定するパターンもあり、連携がうまく機能してこそ、その効果は円環的につながるものです。

「別室」利用と並行して、児童生徒や保護者がカウンセリングによる心理的支援を利用することは大変効果的です。教職員にとっても、専門的な見立てと関わり方の示唆を得ることができます。

「別室」での満足度と教室復帰

「別室登校」で児童生徒が感じる満足度には2つの要素があります。

① 「別室」内での関わり

- ・先生から勉強を教えてもらったことはよかった。
- ・プリント等を使って自分で勉強できたことはよかった。
- ・先生と相談ができてよかった。

② 「別室」外との関わり

- ・学校行事に参加したことはよかった。
- ・学級の友だちと会えてよかった。

『別室』外との関わり」の満足度が高い場合に教室復帰効果が高いことがわかりました。教室復帰に向けた心の準備が整っているかを丁寧に見極めた上で、『別室』外との関わりを増やしていくことが教室復帰への道筋となります。

「予防型」と「復帰型」

教室に登校していたが欠席しがちになり「別室登校」するようになったタイプを「予防型」、家庭や教育支援センターにいる不登校状態から「別室登校」するようになったタイプを「復帰型」と分類しました。

「予防型」と「復帰型」による対応のしかた

統計的に小学校では「予防型」は「復帰型」に比べ教室復帰する傾向がありますが、中学校では2つの型に教室復帰の差はありませんでした。欠席日数の増加や登校しぶり等の兆候を見逃さず、児童生徒の変化を早期に把握し、対応することが大切ですが、中学校では「予防型」「復帰型」を問わず、状況が長期化、深刻化していると考えられるため、生徒の状況を丁寧に見立てながら焦らずに関わることが大切です。

京都府総合教育センター教育相談の申込方法

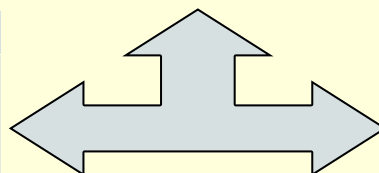
子どものことで相談したい。コンサルテーションを受けたい。子どもや保護者に教育相談を紹介したい。

ふれあい・すこやかテレフォン

075-612-3268、3301
0773-43-0390

来所教育相談

- ・総合教育センター、北部研修所で、臨床心理士、精神科医等が面接します。
- ・広いプレイルームでのプレイセラピー
- ・落ち着いた面接室
- ・子ども、保護者へのカウンセリング
- ・教職員へのコンサルテーション



巡回教育相談

- ・乙訓・山城・南丹・丹後教育局、アグリセンター大宮で、臨床心理士等が面接します。
- ・子ども、保護者へのカウンセリング
- ・教職員へのコンサルテーション